新城　川村類造手沢本『高安流脇仕舞附　乾』

飯塚　恵理人

〔解題〕

川村類造師は、新城の富永神社の祭礼を中心に明治から戦前に活躍した高安流の脇方である。師の使用された型附のうち、仁・義・礼・智・信の五冊よりなる『高安流脇仕舞附』は、現所蔵者の川村直子氏のご厚意で、「名古屋芸能文化」に翻刻・掲載させていただいた。いずれも、川村類造の師匠にあたる鈴木九平が筆写したもので、五冊共に鈴木九平による「明治十五年壬午十一月写之」という年記がある。この五冊の型附本とともに所蔵されているのが『高安流脇仕舞附　乾』『高安流世理賦附　坤』である。『高安流脇仕舞附　乾』は奥書等はない。仁・義・礼・智・信の五冊と同じく脇の所作について記した型附である。この『高安流脇仕舞附　乾』冊には脇方にとって特に重い曲は含まれていない。またいずれも現行曲であり、稀曲というものはない。特に替の型として記されているものもない。その意味で仁・義・礼・智・信よりも初心者向けのテキストであると言える。この本は目録と、本文で順序が違っている。《東岸居士》は目録で44番目だが本文では47番である。同様に《哥占》は目録47番目・本文50番、《芦刈》は目録50番目・本文53番、《邯鄲》は目録53番目・本文56番、《猩々》は目録56番目・本文59番、《俊成忠度》は目録59番目・本文62番、《羽衣》は目録62番目・本文44番である。目録に載りながら本文がない曲はない。この本が写される前の段

階に、もとの本の糸が切れるなどで一部順序が入れ替わっていたのではと推定される。

『高安流世理賦附　坤』は、脇の詞章について記したもので

明治十五年
十一月調之　　鈴木九平
此世理賦附附仁義礼智信五冊
之仕舞附ニ相添置候事
（印：）川村

とあることから、原則としてこれら五冊の脇仕舞附の所作に沿う形の詞章が記されていると考えてよい。この『高安流世理賦附　坤』については次号に翻刻・掲載させて頂きたいと考えている。『高安流世理賦附　坤』とセットとされていることからも、この『高安流脇仕舞附　乾』は明治一五年かその前後に書写されたものと考えるのが自然であろう。

近世末期から明治初期の高安流の脇の所作に関する伝書は、ほとんど公開されていない。そこで、今回は、この『高安流脇仕舞附　乾』を翻刻する事とした。内容の吟味は、今後の課題としたい。

〔凡例〕

原本に忠実に翻刻することを心がけたが、読解の便宜を考え以下の点について改めた。

1、曲名の上の〇欄に曲の順序をアラビア数字で記した。《東岸居士》《哥占》《芦刈》《邯鄲》《猩々》《俊成忠

度》《羽衣》の七曲は、目録と本文で曲の順序が異なる。本稿では本文の曲順を曲番号として記した。目録の曲順は原本通りに翻刻されているが、番号は続きになっていない部分があるのはこのためである。

2、旧字体は原則として新字体に改めた。

3、私に句読点を施した。

4、謡曲・間狂言本文の引用と考えられる部分は「」で囲んだ。

5、能の曲名は《》で囲んだ。

6、原本の書き入れは〇で囲み、その書き入れの該当部分に示した。

7、原本作成の段階で、最初から意図して小さい文字で記したと考えられる部分は〘〙で囲んだ。

8、原本の墨消チとなっている部分は【】で囲んだ。

9、原本で読解できない文字は□で記した。

〔翻刻〕

（表紙題箋）

高安流脇仕舞附　乾

（見返し　文字の向きが逆方向に記されている。（30）《土車》に同文あり。この反故を利用したものか。）

台ニ入ル。「身ヲ投ん」と云時笠ヲ捨

（目録）

（1）田村（2）箙（3）八嶌（4）忠度（5）兼平（6）知章（7）巴（8）・碇被（9）・道盛（10）敦盛（11）・半蔀（12）杜若（13）玉葛（14）浮船（15）通小町（16）・女郎花（17）六浦（18）・梅枝（19）・春日龍神（20）桜川（21）・鞍馬天狗（22）・龍田（23）・當摩（24）・東北（25）夕顔（26）采女（27）佛原（28）・舎利（29）・鵺（30）土車（31）花月（32）・阿漕（33）・錦木（34）大会（35）車僧（36）・殺生石（37）経政（38）・是界（39）巻絹（40）小督（41）・富士太鼓（42）・天鼓（43）二人静（47）・東岸居士（45）・雲林院（46）・項羽（50）哥占（48）唐船（49）百萬（53）苅芦（ママ）（51）・山姥（52）海人（56）邯鄲（54）・小塩（55）松虫（59）猩々（57）・鐘馗（58）昭君（62）俊成忠度（60）船橋（61）・野守（44）羽衣（63）・鵜飼（64）一角仙人（65）【実盛（？）】清経（66）葵上

（本文）

（1）《田村》

出立、無地熨斗目・水衣・腰帯〔緞子〕・角帽子〔緞子〕・墨絵扇子・珠数。脇連二人同前。次第三段也。二段目ニ出、幽延し立帰り、連ニ立向所台端ゟ五尺程。名乗・答拝、踏廻立向。道行別儀なし。本着。着廻賦。連の答あり。座ニ行下ニ居。楽長出、小謡中の打切ニ見、返に壱足出、問答。初同打切ニ離す。但楽長会釈心付へし。謡済、楽長太鼓座へ行、箒木ヲ捨、正面ニ向と問答。「先是より南に」ト南の方を見。但真後ロを正面へ向間敷也。「又是ゟ北」ト北の方を見。「此花」と正面ヲ楽長見ル時脇も見。「今此時」トシテ会釈と見。「やら〳〵面白」と楽長脇の方ニ来たるとワキも三四足出、楽長脇の袖を取誘い、正面ニ出、扇子ニて指ス所を見。楽長会釈の時応し、左へ踏廻、座ニ行、下ニ居、会釈。曲舞離ス。楽長会釈、心付べし。論儀ゟ中入迄見。廻賦猿楽ゟ掛ル。語等会釈居。後大小腰掛鼓を上ル

を合図に待謡居ながら諷ふ。問答して腰掛居るうちハ見、床机を離ると放シ、翔勿論也。「いかに鬼神」と会釈。切迄見、返シニ放ス。後別義なし。

（2）《箙》

出立、次第・名乗・道行、前に同じ。連同前。着廻賦。「又是成梅の」と正面真中少し右ノ方ヲ見、「立寄一見」と連二会釈。連応して座ニ行、下ニ居。但連ニ立向所六尺程。シテ出、小謡「よしとて候」見。返シニ立、壱足出、問答。「是成梅」と初の所ヲ見。「さん候。箙の梅」ト楽長ニ向。初同打切ニ其儘下ニ。中入迄会釈。廻フ間の謡始の如し。後楽長出ルト見、問答。翔放ス。留リニシテ会釈ニ応ス。「実ニ見れば」ト角懸「山震働」ト楽長ニ会釈。切迄也。但楽長次第。無様ニ頼候ハヽ名乗ニもス。後別義なし。

（3）《八嶋》〔名乗ニ而も致し候。〕

出立、次第・名乗・道行、《田村》ニ同し。シテ出、小謡中の打切ニ見、返シニ放して立。尤楽長大小の前に床机に掛り、シテツレ下ニ居。見合立、一足出、脇「思ひ候」ト謡、仕廻、右ニ披キ、壱足出、「いかに此塩屋」と云。仕手連か楽長ニ向時、脇も放ス。仕手連「其由申て」ト云時、会釈「重て仰候へ」ト云て又放ス。楽長「さらはお宿を借申さん」と向。連諷時ハ会釈有べし。「八嶋に立る高松」ト仕手ノ方へ二三足出、下ニ居。「扨慰」の打切ニ閑ニ立、左へ披き静に座に行。会釈なら下ニ居。楽長床机ヲ放し、まふ時ハ放ス。曲留ニ会釈、後中入迄見。せりふ狂言より懸る。但那須有ル事もある也。待謡同し。後シテ台ニ入ルト見。問答、仕手床机を離るト放ス。「又修羅道」と見。翔不見。「けふの修羅」ト見。「浦風なりけり」と放ス。後別儀なし。

（4）《忠度》

出立次第同前。連ニ立向所一間半。名乗・答拝済、壱足引「城南の」と謡なから左へ踏廻、連ニ向。「関戸の宿」より

三人ニテ諷ふ。道行半着也。着足。廻賦「又是なる磯邊」と正面真中ヲ見。連応済、座ニ行、下ニ居。楽長出、合掌也。右へ披キ、立合掌スル時見。立時脇も立、一足出、問答。「実や須磨の浦」と放ス。仕手会釈心附べし。謡、楽長ニ会釈。問答「花の台に座し玉へ」と其まゝ下ニ。中入返しニ放ス。廻賦・待謡同し。後仕手台ニ入ト見。端懸りにて諷ふ時ハ「うつり替りて来りたり」と見。「中にも彼忠度」ト角掛諷ふべし。「抑後白河」と楽長ニ会釈。「さもいそがわし」の打切ニ放ス。「去程に」見。翔見す。「木の下かけ」より切迄見。後別義なし。

（5）《兼平》

出立、次第・名乗・道行、前に同し。連ニ立向所六尺程。其外何レも同し。楽長出、「焼ぬ先より」ト見。其儘立、壱足出、問答。「とく〳〵召れ」と楽長棹ニ手ヲ掛ルか、又手を指時、舟ニ乗。但脇斗也。胴の間ニ乗べし。尤右の足より乗。又「浮世を渡る」の打切ニて乗事も有。仕手言合次第也。舟の中、正面見、下ニ居。問答。但見ル所能〳〵句当すべし。「粟津ニ早く着ニけり」ト謡済、舟より上り、座ニ行、下ニ居。廻賦・待謡、前の如し。後仕手台ニ入と見。問答轉より放。会釈度々あるべし。論儀ゟ語迄会釈。後別義なし。

（6）《知章》

出立・次第・名乗・道行同し。但立向所六尺程、本着也。着足、廻賦なし。直ニ着詞也。「休らハはや」と連ニ会釈。連答有て、連斗座ニ行、下ニ。脇「又是成旧跡ニ」と正面真中を見。「あら痛わしや」と、座ニ行。楽長呼懸ると右へ踏廻り会釈。立なから問答。「弔らふ事よ」ト正面真中始の所ヲ見。其儘下ニ居、合掌。「一見卒塔婆」ト謡。「けふハ我を」と仕手に会釈中入。廻賦・待謡同し。後大夫台ニ入ト見。問答終迄見。後別義なし。〔但シ独脇の時ハ「休らハばやと思ひ候」と云終て真中へ出、「又是成」と諷ふ。〕

（7）《巴》

出立、次第・名乗・道行・立向所同前。但半着也。「近江路や」ト踏留幽延ス。尤着廻賦。連答等済、座ニ行下ニ居。仕手出、「けふハ粟津」と見る。「参らはや」ト立て壱足出、問答。「神前に向ひ」ト正面真中ヲ見、下ニ居ながら合掌ス。尤中腰也。「古へ」の打切ニとく下ニ。「誓ひぞ」ト大夫ニ会釈。中入迄廻賦・待謡。後仕手台ニ入ト見。曲舞不見。会釈心附べし。但不舞時は可見。楽長立ト放シ「今ハ是迄」と見。切迄後別義なし。

（8）《碇被》

出立、次第・名乗・道行、同前。但緞子角帽子ヲ巻キ、中九寸程有て左右ヲ元結ヲ捻合一すじニして結切。守袋の如く也。袷ニかけ前乳より弐寸程さがる也。連ニ向所四尺斗。尤本着也。着廻フ、連の答等済、座ニ行、下ニ居。大夫出、「磯千鳥友呼」と見。「海士の子供」と立壱足出、問答。但連も同前。「妙法蓮華経」と合掌ス。但楽長下ニ居て合掌する共、脇は下ニ居ス。「とく〳〵召れ」と舟ニ乗。作物出る時ハ、先の間ニ脇、同の間連弐人。作物無時も其心得也。乗ながら「いかに尉殿。先〳〵」ト云。楽長「承候」ト言て舟より上ル。座ニ行、下ニ居。会釈・問答、連も一同に上ル。尤座ニ行、下ニ居。脇中入迄見。廻賦始の如し。後大小の前ニ作物出。幕ゟ出ル。正面角掛、差声謡ふ。「不思儀な」と作物ヲ見。あしらいにて仕手連出る内ハ不見。謡ヲ出スト会釈。早笛放ス。楽長出ルト見。切迄後別義なし。

（9）《道盛》

出立同前。連一人。但紺紙巻掛懐中ス。名乗所始の如し。答拝し、座に行、樋ゟ一尺余下り下ニ居。「磯山」ト諷ふ。楽長出、「聴聞申」ト居ながら見。問答「あし火影を假初」と経ヲ懐中より出シ、右ノ手ニテ取出シ、左ノ手ニ持ながら角掛、右ニテ披キ見。「読誦スル」ト謡。「龍女変生」の打切ニ経ヲ中ヲ二ツに折、左の手ニ持、大夫ニ会釈。楽長「実

〳〵此浦」と云時、経ヲ左手ニ持ながらかけ巻、右ノ手ニテ懐中ス。中入迄見。返しニ放ス。廻賦。待うたひ始の如し。太鼓声合のうちニ居ながら角掛合掌シ、「如我昔所願」ト諷ふ。出端の中、手ヲ下シ、身ヲ直シ、後楽長出、台ニ入ト見。其儘壱足引、下ニ居。「抑此一ノ谷」と放ス。「かくて軍中半」と会釈。切まで見。後別義なし。

（10）《敦盛》

出立、名乗同前。道行ハ仕手柱より七尺程上にて踏留り、初の所より二三尺程太鼓ノ方へ本着也。着足すぐに差詞謡フ。尤独脇也。「南無阿弥陀仏。ヤ」と脇正面角掛「あの上野」ト見。「暫ク此所」と身を直シ諷イ仕廻座ニ行、下ニ居。楽長小謡イ中の打切ニ見、返しニ立。壱足出、問答。「世の業」の打切ニ放ス。但会釈心附べし。謡済楽長ニ向、問答。「たな心」と合掌しながら下ニ居。尤楽長立ながら合掌せバ、脇も同じ。「捨させたまふなよ」ト下ニ居。中入迄見。廻賦待謡前ニ同し。後仕手出、「何とて」ト見、問答。楽長、長立居時ハ、差より放ス。「かくてきさらぎ」と見。舞放し「去程に」と会釈。切迄後別義なし。

（11）《半蔀》

出立、名乗所前ニ同し。答拝し一足引、舞台真中端より四尺程前ニ下ニ居。差声謡。「草木国土」ト合掌シ、謡済、手ヲおろし、座ニ行、下ニ居。大夫出、謡イ出スト見。居ながら問答。中入迄会釈。廻賦、狂言呼懸云云有。是を相掛ト云。作物太鼓の前ニ出、後見這入と立、静ニ作物ノ方ヲ見。三四足程出、「ありし教へ」ト謡フ。「ちまたにしげし」と謡イ、仕廻座ニ戻り、放シ立居。「れいてう深ク」と作物ヲ見。「御姿見るニ」と其儘下ニ居。曲舞不見。「ついの宿りハ」と会釈。「半蔀の内ニ入」と放ス。後別義なし。

（12）《杜若》

出立、名乗所同前。道行、シテ柱より六尺程。本着也。廻賦有。「又是成澤」と台端真中ヲ見、言終て台端五尺程手前

踏留差声諷ふ。「うつくしの杜若」と謡イながら、座ニ行、楽長呼掛ルト其儘見。一足出、問答。「さらハこう参り候」と踏廻、【座】ニ行、下ニ居、放。楽長物着有。「喃〳〵是成」ト云時、居ながら見。問答。轉の前、色笛より不見。「うたがわせ給ふな」と会釈。舞放ス。「植置シ」ト会釈。切まで後別義なし。

（13）《玉葛》

出立、名乗所前同し。但角帽子縫をも用ユ。答拝し一足引、道行。本着也。廻賦等有。座ニ行、下ニ居。大夫出、「人や見るらん」見、返シニ脇正面ニ向、立一足出、謡フ。「少キ舟」と大夫ニ会釈、問答。「ほの見へて」と脇正面角掛静ニ一足出。〔口傳有〕「夕かな」の打切ニテ正面ニ壱足出、「かくて御堂」ト下に居合掌し、「補陀落山」と立。「四方の詠」と右へ披、見廻し、大小の方へ着て。尤二三足出。大夫「二本の杉」と云所を見、諷フ。「何と詠れたる」と楽長ニ向。「心得能〳〵」と下ニ居ル。中入迄見、返しニ放ス。廻賦、狂言より掛ル。後別義なし。〔口傳あまた有。〕

（14）《浮船》

出立、名乗所より座ニ行迄如前。楽長出、「みしめなわ」ト見、返シニ立。一足出、問答。「小嶋か崎」と楽長見る所を見。「後より雪の」ト脇正面ニ放ス。謡済、楽長に向、廻賦有。下ニ居、中入迄見。廻賦狂言より掛ル。大小懸ると待謡諷ふ。打切に立。「うつるも迷ふ」と角掛一足出。「哀を」と下ニ居。合掌し謡済、手ヲ下、脇正面ニ放ス。後大夫台ニ入ト見ル。翔見ず。「大慈大悲」と見。切迄会釈。後別義ナシ。

（15）《通小町》

出立、名乗所同前。答拝過、座ニ行、下ニ居。連女出、「木の実妻木」と言時居ながら見。問答中入迄会釈。廻附なし。連女太鼓座ニ座ス。其儘「只今の女性」ト謡出ス。「此草庵」の打切ニ立。「尚草深く」ト正面角掛壱足出、「尋行」と下ニ居。合掌し「南無」ト謡仕廻手ヲおろし脇正面向、連女諷フト見ル。尤連女脇の上へ来ル。翔不見。「唉」

ト太夫ニ向。切迄見。後別義なし。

（16）《女郎花》

出立、名乗所・道行同前。但半着也。廻賦有。「又向ひ」ト少し上を見。「是成野邊」ト左ニ披キ詞済舞台先より一間斗手（ママ）ニ出、踏留、差声謡。「立寄ば」と座ニ行、楽長呼懸ルト其儘見、一足出、問答。「暇申て」ト左ニ掛、正面向、「本来し道」ト一足出。仕手「しろしめしたり」ト振返り会釈。「かのかんたん」ト立ながら放ス。楽長「此方へ御出」ト角掛一足出、「聞しニ」と謡。「和光」ト大夫ニ向。「神の御幸」ト本のごとく角掛下ニ居。中腰ニて合掌ス。「岩松」ト立「鳩の峯越し」と大夫来り謡。正面ニ連出、「千里も同し」と左へ廻り、座に帰り立居。大夫「是こそ」ト見ル所ヲ可見。「暫らく」と仕手ニ向。大夫又「此方へ」ト壱足出。脇正面の方ヲ「男塚」トおしへ、脇座の上を「女塚」と教ゆる。「夫婦の人」ト楽長ニ向キ、「夢の如く」の返シニ下ニ居。廻附狂言ゟ懸る。待謡居ながら角掛合掌し「南む」と謡フ。後別義なし。後楽長出、「花の夫婦」と見。問答、連女脇の上へ来ル。曲舞不見。「邪婬の悪鬼」より切迄可見。

（17）《六浦》

出立・次第・名乗・道行同前。但常ハ熨斗目・小格子ニテも着流シ。連ニ立向所七尺斗。着足済。差詞。「是ニよしあ（ママ）しげ成」ト正面真中少し左を見、「立寄一見」と連ニ応答、連答済。連弐人とも座ニ行、下ニ居。脇ハ正面ニ三足斗出、「荒面白の紅葉共」と諷フ。「是成庭ニ木立チ」ト少し右へ披キ「人来りて候ハヽ」ト座ニ行。大夫呼懸ルト立戻り壱足出、問答。「我数ならぬ身なれども手向の為」と正面角掛「朽残ル」と謡フ。大夫「荒有難や」と其儘見。「夜もすがら御法を」と下ニ居。中入迄見。廻賦狂言より掛ル。間の謡同前。後楽長台ニ入ト見。問答曲舞ト「木の間の月」と放ス。後別義なし。

（18）《梅枝》

出立・次第・名乗・道行、同前。連ニ立向所六尺斗、本着也。着廻賦「荒笑止や」と正面高ク見。「是成庵り」と太鼓の前ニ行。案内乞左へ角掛待。「言問人」ト楽長ニ向。「早此方へ」と踏廻、座に行下ニ居。連も同前。初同のうち作物台真中の先ニ出有。「所ハ住吉」と放シ、作物ヲ見。「いかに主シ」と楽長向問答。中入迄見。廻賦狂言より掛ル。待謡例の如し。居なから角掛謡フ也。「一者不徳作」と合掌し、「へうかへ給へや」と謡済、手ヲおろす。「弔らふ灯」ト楽長を見。問答「されハにや女心」ト放ス。論儀見る。楽不見。「我も御法」より切まて見。後別儀なし。

（19）《春日龍神》〔上懸りハ待謡有べし。有方ニさすべし。〕

出立・次第・名乗・道行、同前。但、小格子・大口可着。連ニ立向所六尺斗。廻賦答済、座ニ行、下ニ居。大夫出、小謡中の打切ニ見、返しニ立、一足出、問答。「はてしなの心や」ト楽長ニ向ながら下ニ居。差声角掛謡フ。「為ぞかし」と楽長ニ向、中入迄可見。狂言構なし。但上掛りハ間ノ謡可有。渡時に「大地」ト階掛りの方ヲ見。早笛の内不見。大夫出ルト見。切迄後別義なし。

（20）《桜川》

出立、小格子・水衣〔白・紫の外、何にても〕・大口・角帽子〔大模様・鍛子〕。楽長中入過、次第ニて出ル。連二人或ハ四人。初子方出、次ニ脇也。立向所五尺斗。次第・名乗・道行同し。但半着也。脇「是ニ渡候」と子方ヲ見。着廻賦済、座ニ行、大夫出「我子の花ハ」と見。返シニ放、立一足出、謡イ「いかに是成」と応答。「常よりも」の打切ニ放ス。「あら笑止や」ト会釈。「実〳〵見れハ」ト角掛、「河風に」ト見、「すくわん」と謡イ済、下ニ居。論儀、子方ノ会釈にて、脇は構ひなし。但初メ連男、素袍上下・少刀・鎮目扇。文懐中ス。名乗所太鼓前通り仕手柱より三尺斗出、二足引名乗ル。答拝し一足引「此当り」と云。左へ披キ、踏廻り階懸りへ行、案内ヲ乞。「文の候」ト取出シ、

仕手の側へ行。渡しうしろヲ通り、幕より入。尤左の手ニふミを持べし。京掛りハ変可有。相手の時前方ニ可尋事なり。

（21）《鞍馬天狗》

出立同前。但、連四人。或ハ六人。始大夫名乗、太鼓座ニ付ク。狂言出、シカ〳〵の内ニ子方三四人先立、階掛りニ立並ブ。狂言文を持来ル。脇ニ渡ス。少シ左へ披キ「何〳〵」と謡フ。「木陰にてこそ」と狂言ニ会釈。「花咲ハ」と文ヲ巻。「手折しおり」ト座ニ行。子方6次第ニ立、下ニ居。謡済、狂言呼出、廻賦あり。「皆〳〵御立候へ」ト子方ニ向。沙那王壱人残ル。其外ハ次第〳〵ニ立入。別義なし。

（22）《龍田》

出立、熨斗目・着流・角帽子・水衣・数珠・扇子墨絵。尤、僧脇続時ハ大口ヲモ可着。始作物大小の前ニ出あり。次第・道行・名乗、常の如し。連ニ立向所六尺斗着。廻賦。「此河ヲ渡り」ト連ニ向答有て、座ニ行、大夫呼懸ルと其儘向答。連ハ下ニ居、「河の面モ」ト正面見。「許させ給へ」と大夫ニ向。「此方へ御入候へ」と作り物の方へ二足出、「扨ハ是成か龍田の明神」と作物ヲ見。「是ハ御神木」ト作物ヲ見。「和光の影」と一二足出、中腰にて「我等ヲ」ト合掌ス。「殊更ニ」ト手ヲおろす。打切ニ下ニ居。脇正面角掛「いさ宮廻り」と大夫会釈の時見、立、静に踏廻り座に行、「ふしぎやな」ト大夫ニ向。「我ハ誠ハ此神の」ト下ニ居、中入迄可見。廻賦相掛り也。待謡居ながら謡。後「御殿しきり」ト作物見。轉より放シ、「去程ニ」ト見。神楽不見。「久堅の」ト見。切迄後別義なし。

（23）《當摩》

出立同前。尤僧脇続キ、切の能の時ハ大口可着。次第・名乗・道行、前ニ同し。連ニ立向所九尺斗、廻賦済、座ニ行、下ニ居。大夫出、「たま〳〵此」ト見。返ニ立、一足出、問答。「先あれに」ト角掛「是成寺」ト正面見。連諷フ時ハ

応答。「又是に見へたる」ト脇正面ヲ見。「是も故有」と大夫ニ向。「色はて（ママ）」の打切ニ下ニ居。但轉前廻附有時ハ、廻賦言畢て下ニ居。中入迄見、狂言呼出。廻賦附有。間の謡、居ながら諷フ。後大夫出、「いたゞき祭れ」と経ヲ渡ス。二三足いで角掛中腰にて披ク。左ヲ上ケ可読。「十声も一声」と二つに折、両手にていただき左ニ持、座へ行、下ニ居、巻、懐中ス。舞不見。「後夜の鐘の音」ト見。切迄後別ギなし。

（24）《東北》

出立、熨斗目着流シ。水衣・角帽子・珠数・扇子。連二人、次第・名乗・道行同前。連ニ立向所七尺斗、尤半着也。廻賦、連答済、入替り階懸り太鼓の前。狂言廻賦済、台端真中四尺斗有之。差詞云。「荒面白」と座ニ行、大夫呼掛、会釈同前。「又あの方丈」と正面角掛、「御休所ニテ」ト大夫ニ向。問答初同打切ニて下ニ居。中入迄見、廻賦。狂言ゟ掛る。待謡同前。後楽長出、台ニ入と見。轉ゟ放ス。会釈由断有べからず。舞過切迄。後別義なし。

（25）《夕顔》

出立同前。名乗所太鼓右の手通り、名乗足三足。連ハ階掛りニ中腰にて居。脇答拝し、一足引、差声謡イながら連ニ立向所六尺斗。道行し「尋ね問てそ」ト連ニ入替り、仕手柱より二三尺斗有て謡済、幕の方ヲ見、「ふしぎやな」と諷ふ。「休まばや」と謡過、座ニ行、下ニ居。太夫出、「真如月も」ト見、返しニ立、一足出、問答。轉に其儘下ニ居。中入迄見ル。廻賦同前。待謡例の如し。後大夫出、台ニ入ト見。居ながら問答。舞不見。「お僧の今」ト見。切迄見。後別義なし。

（26）《采女》

出立・名乗所、同前。但角帽子、縫をも可着。連立向所も同前。尤本着也。廻賦答等済、座ニ行、下ニ居。楽長出、小謡中の打切ニ見、返しニ立、一足出、問答。「此山ニ（住）給へば」ト正面真中ヲ高ク見上ル。「扨菩提樹」ト右へ

静ニ見廻ス。楽長「此方へ御入」ト脇正面角掛ニ三足出、「御経ヲ読仏事ヲ」ト大夫ニ向。「わきもこか」の打切ニテ下ニ居。中入迄見。廻附同前。待謡其儘。尤大小掛りて也。後楽長台ニ入ト見。居ながら問答。轉ゟ放ス。舞過ルと見。切迄後別義なし。

（27）《佛原》

出立同前。角帽子、縫ヲモ可着。次第・名乗・道行始の如ク、尤半着也。連ニ立向所六尺斗。廻附「是成草堂」と脇座を見。「一夜を」と連ニ向。答済、座ニ行、大夫呼掛ルと其儘一足出、問答。連ハ下ニ居。初同打切ニ下ニ居。轉の前廻附有。句当可有。中入迄見。廻賦狂言より懸る。間の謡大小懸ルと居なから諷ふ。後大夫台ニ入ト見、問答。舞不見。「猶尚」と見。切迄後別義なし。

（28）《舎利》

出立、次第・名乗同前。始作物台端真中ニ出有。廻賦済、左へ披キ、踏廻、階掛りの方へ行。《松風》ニ同し。狂言シカ〳〵済、作物の前三尺斗手前ニ下ニ居。差声謡。「一心頂礼」と合掌ス。地ニ取と手ヲ卸し「拝する事のあらたさを」の打切ニ左へひらき、静ニ立、座に行、下ニ居。楽長出、不見。「声す也。いかなる」と見る。尤居なから問答。曲舞済迄見。「ふしぎやな今迄」ト角掛諷フ。「提(?)此舎利」と大夫ヲ見。中入迄廻附。狂言より掛る。後別義なし。

（29）《鵺》

出立、次第・名乗・道行。廻賦過、太鼓座の前ニ狂言呼出ス。前ニ同し。「是非ニ不及」ト踏廻り、座の方へ二三足静ニ行。狂言呼懸ルト急ニ向、立戻ル。「あの堂ハ旁々ニ」と又踏廻り、静ニ座ニ行、下ニ居。口伝多ク。大夫出、「忍はつへき」と居ながら見。問答。中入迄見、返しニ放ス。廻賦、間の謡、例の如し。角掛合掌し、「一佛成道」と謡出ス。済で手ヲ下ケ、脇正面ニ向。後大夫出、台ニ入と見。其儘立合掌し「一仏」と謡フ。「五十二類」ト手ヲ卸、下ニ

居、問答。「則御悩」の打切ニて放シ、「時鳥」ト見。切迄跡別義なし。

（30）《土車》

出立同前。但笠ヲ着出ル。次第始のごとし。地返シノ内、名乗足。尤笠ヲ脱、名乗・答拝し、一足引ながら笠ヲ着ながら差声謡フ。道行同前。但半着也。着足の内ニ笠ヲ脱、廻賦済、座ニ行、下ニ居。右の方ニ笠ヲ置。尤紐ヲ手前ニ少し出シ置。大夫出、不見。「声を上て呼へとも」ト見。「捨て狂ハじ」の返ニ角掛立。尤笠右ニ持提、一足出云。「又此方成ハ」ト大夫ヲ見、「や」と角掛、「荒何ともなの事ヲ思ひて候」ト云。「誠に」と笠ヲ着、「南無阿弥」ト静ニ大夫子方の前を通り太鼓座ニ付ク。曲舞過、「二人ハ手ニ手」ト階掛り一ノ松の本ニ出、脇正面角掛こゝろつよ〳〵ト謡フ。「又引返ス」ト笠ヲ脱提「追て行」と台ニ入ル。「身を投ん」と云時、笠ヲ捨、走り寄、大夫・子方の袖ヲ両手ニて取ル。「葉末の露」と後へ三四足引、「又父ニ」と泣。但左の手也。「又もや父ニ別レなん」の打切ニて子方ヲ先に立入。亦爰にて座ニ行、下ニ居もする也。句当次第也。

（31）《花月》

出立、次第・名乗・道行同前。但笠不着。着廻附云。踏廻り、階掛り太鼓の前ニて狂言呼出シ云云有り。踏廻り、座ニ行、下ニ居。楽長出、不見。「朽木の柳は緑」ト見ル。謡済、角掛立、「是成花月」と謡フ。楽長ヲ見。「やあいかに」と云。仕手鞨鼓附る内、狂言来り云云有。畢て放し下ニ居。「今より此桜」と立、「あれ成御僧」と入。尤鞨鼓済と可見。又不入に其儘居事もあり。句当次第也。後別義なし。

（32）《阿漕》

出立、次第・名乗・道行同前。着廻附済、座ニ行、下ニ居。太夫出、「浮世の業」ト見。立、一足出。問答済、詠哥の所放シ謡フ。大夫謡フト見。大夫下ニ居所ニテ座ス。「海つらくらく」と左へ披ク。中入迄廻賦。狂言ゟ懸ル。間の

謡、大小掛り、居ながら諷ふ。例の如し。後楽長出、「猶執心のあミ置ん」と見。翔、中ヨリ不見。「只罪をのミ」と見。終迄後別義なし。

（33）《錦木》

出立、次第・名乗・道行同前。始作物大小の前ニ出有。本着也。廻賦済、座ニ行、下ニ居。但独リ脇続キ、又は六拾歳以上ハ二人連ても不苦。楽長出、「細布の色杜」ト見、返シニ立、一足出、問答。連女へ会釈勿論也。「実や名のミ」と放し、「やどりにいざや」ト見。廻賦済、下ニ居。但楽長立ながら語る時ハ、脇同前也。「あふいで〳〵」と楽長立時、脇も可立。大夫の方へ一足出、「かの岡ニ」ト放ス。仕手応答有べし。〔習有リ〕「紅葉染て」と作物の方へ壱足出見。返しニ一足引、下ニ居放シ、廻附例の如し。待謡同し。後「いかに御僧」ト連女ヲ可見。大夫諷フト見。尤連女脇の上ニ来り「きりはたり」の返シニ放ス。差声より可見。「去程ニ思ひの」と放。舞過て見。「野中の」ト作物ヲ見。後別義なし。

（34）《大会》〔出立《石橋》ニ同し。〕

出立、金襴角帽子・沙門小格子・大口・水衣。緋ヲも用ゆ。囃子方、地謡迄座定て出ル。床几ニかゝる。其後謡出ス。「一佛乗の峯」と正面角掛「風常楽」ト静ニ放ス。楽長出、「人の音するハ」ト見。問答。「さあらばあれに」と角掛「能〳〵御覧」と仕手ニ向、中入迄返し放ス。狂言構ひなし。後楽長出、不見。「両眼のひらき」ト角掛、「釈迦如来」ト大夫ヲ見。太鼓打返し、「僧正此時」と言泣、「心ヲ起し」と立、三足出、中腰にて「一心に」と合掌し、「俄に大嶺」と手ヲおろし、立戻り下ニ居。後不見。

（35）《車僧》

出立、大口・小格子・緞子・角帽子・沙門・水衣〔紫・緋の外用ゆべし〕掛絡・珠数〔半水晶〕・金入色なし扇。次

第、例の如し。作物始ニ脇座ニ出有。車也。次第、地返シノ内に、着足の如ク、正面向道行常のごとし。「花沙」ト踏、幽延し右へ見廻し、座ニ行、車ニ乗。尤前ゟ乗べし。〔口傳〕床几ニ掛ル。角懸廻賦言畢ルト、大夫呼掛ル。其儘見、問答。中入ニ放シ、狂言構なし。但鷺流ニてハ、脇右の方へ来りコソグル。其時ハ扇子にて会釈ある。〔習アリ〕後大夫出、「いさ車僧」ト見。問答。「あら面白の」と放シ「何事ヲ」と見。「路地ノ」ト角掛「拂子ヲ上ケテ」ト右の手ヲ上ル。〔口傳〕「小車の」ト見。切迄後別義なし。但中入前「浮世をバ」の脇の謡の時、角掛謡フべし。後働ニハ「社」と放し、「車僧」と見モ有。

（36）《殺生石》

出立、次第同前。但数珠ハ常の僧珠数ヲ用ユ。始作物大小の前ニ出有。狂言柱杖ヲかたげ附出る也。名乗・道行常の如し。廻賦の内、狂言詞あり。其儘右へ披キ、階掛リヲ見。狂言と云云有。座ニ行、楽長呼掛ルト其儘見、問答。轉前廻附云、下ニ居。中入迄。狂言懸ルト「さあらバ柱杖」ト言畢て太鼓座ゟ持来ル内ニ扇ヲ指、柱杖ヲ受取。取リ様ニ習有り。立、作物の方五六足出、謡出ス。勿論立ヲ見て小鼓打懸ル。「今生斯の」ト一二足出、単身ニて作物ヲ柱杖少シ様(?)ニして「されく」と二ツ前ゟ向へ打〔習アリ〕。其儘捨、珠数ヲ掛、「自今以後」と中脇ニテ合掌ス。珠数はスラズ。立戻り座ニ行、「二ツにわるれバ」ト大夫ヲ見。「頓テ五体」ト放ス。「猶執心」と云より切迄可見。後別義なし。

（37）《経政》

出立同前。但沙門ニあらず。水衣〔紫・緋可用〕。珠数・扇子出様《大会》の如し。床几ニ懸ル。差声諷ふ。楽長出不見。「夜の灯」ト見、問答。初道過放ス。「不思儀やな」ト諷フ。「扨も我」と云時見、「去レハかの経政」の打切ニテ放。「ふしぎや晴たる」と角掛少シ高ク見、「時の調子」ト楽長ニ向、「あれ御覧せよ」と大夫見る所ヲ見。「太絃ハ」ト放ス。「先ニ見へたる」ト見。「灯をふき消して」ト放ス。後別義なし。但名乗答拝シ座へ行。

（38）《是界》

出立《大会》ニ同し。珠数ハ平形。連僧二人。大口也。中入後、車の作物出ル。尤後より乗ル。一声一段ニテ出ル。謡「かくて」と角掛「山河草木」ト右へ静ニ見廻り、幕の方ヲ見。「こは抑」と放し、床几ニ掛ル。大夫出、「あら物〳〵し」ト見。「ふしぎや雲の」と扇ヲ指、珠数ヲ右ニ持。但輪にして。翔不見。留ニ脇ヲ見、走リ来ル。太鼓打上ニ不構。「聴我説者」ト謡フ。尤珠数ヲかけ大夫ニ少シあて合掌ス。「うんたら」ト祈ル。「其時御声」ト手ヲ卸し床几ニかゝる。扇ヲ持、珠数ヲ左ニ取。尤連ハ脇床几ニ掛ルト下ニ居。後別義なし。

（39）《巻絹》

出立、立烏帽子・狩衣〔赤地ニテモ、何イロニテモ〕・厚板・大口也。扇〔色入〕。名乗所、大鼓右の手通り、答拝し、座ニ行、下ニ。仕手連男出、「都ゟ巻衣」ト見。立一足出、問答。「其身の科」の打切ニ狂言呼出。廻附あり。放シ居、楽長呼掛ルト見。問答「いかに汝」と連ヲ見。「匂ハざりせば」ト大夫ヲ見。地謡の内同前。「神秘を御物語候へ」言畢て「いかに誰か」ト狂言ヲ呼「禁メヲゆるし候へ」と云畢て座ス。居曲舞ノ時ハ見ル。立時ハ放ス。曲舞過楽長ヲ見。「左有ハ祝言」ト云。神楽不見。打上ヨリ終迄可見。又、他流ニハ始ノ案内ヲ狂言ニ云有。其時ハ、「心得て有。」トウケ、連男来ルヲ見、問答。後別義なし。

（40）《小督》

出立、名乗所・答拝、同前。踏廻り階懸太鼓座ノ前ニ行、案内乞。大夫問答「申上けれハ」ト正面へ二三足出、中腰ニテ手ヲ下ケ「此よし」ト云。「寮の御馬」ト膝立直シ、楽長ヲ見。「賜ル也」ト云。「頓て出候や」ト立、笛ノ上ニ角掛立居。中入ニ脇も入。後別義なし。

（41）《富士太鼓》

出立、名乗同前。答拝シ、狂言廻附有。座ニ行、下ニ居。楽長出、狂言来、廻賦有。子方・大夫台ニ入、大小の前ニ来ル頃立、謡イなから問答。「今ハ歎クニ」ト左へ踏廻、地謡の前に行、中腰にて舞衣・鳥甲ヲ両手ニテ持、右へ披キ始ノ所ニ行。「是杜」と大夫ヲ見云。「兼てゟ」の打切ニ放ス。尤大夫ニ二品ヲ渡シ立戻リ座ス。論儀ニ見。「皆脱捨て我心」ト放ス。後別義なし。

（42）《天鼓》

出立、名乗所同前。答拝過、地謡初座ノ前ニ下ニ居。大夫出、小謡中ノ打切ニ立、階懸り太鼓座の前ニ行、案内ヲ乞。問答、「假令罪にハ」の打切ニ踏廻り、脇座ニ行、立角掛。尤始脇正面ニ作物出有。謡済、大夫ニ向、「是ハ早内裏」ト言畢て下ニ居ル。「生て有身」の地返ニ放ス。論儀可見。但大夫下ニ不居ハ、脇も「生て有身」にて放し下ニ居ル。「打ハふしぎ」と作物ヲ見ル。謡済、楽長ニ向、「親子の命」と言畢て楽長の答済、右へ披キ狂言呼出、大夫中入ス。狂言又来て廻賦有。大小掛テ立、壱足出、待謡諷ふ。太鼓声合ニ角掛「水とう〳〵」と諷ふ。済て下ニ居ル。楽長出ルト見、居ながら問答。楽不見。済ト見。「五更の一㖞(?)」ト放ス。但上掛リニハ太鼓なし。小鼓ヲドリ打て謡出ス。別義なし。（間廻賦前ニ習有ル也。）

（43）《二人静》

出立、風折〔紐、紙捻〕・狩衣〔緋色・黄・浅黄〕・小格子・大口・腰帯〔縫紋〕・扇〔無地〕。名乗所同前。答拝過、左へ披キ、右へ踏廻り、仕手柱ゟ三四尺斗先ニ行、幕の方ヲ見。廻賦有。座ニ行、下ニ居。連女出、「若菜ヲ」ト云時見、立、一足出、問答。「言語同断」と角掛、「やあいかに」ト向。「ふしぎの事也。」ト謡なから左へ踏廻り、地謡の上ニ行。長絹ヲ両手ニ而持(モチ)、右へ披キ角掛、始の座ニ行。「さらハ是ヲ着て」と女ニ向、「とく〳〵」と歩ミ寄渡シ、

立戻ル。尤座ス。物着済見。問答「今ミよし野」ト放ス。「おもひ返せハ」より切迄見。別儀なし。

（44）《羽衣》

出立、放し髪・段熨斗目・水衣・着流シ。扇子〔色無〕腰ニ指。腰帯〔縫紋〕。但大口着事も有〔一日晴ノ時〕。釣竿右ニカタゲ〔但釣糸シロ〕連二人同前〔但無地熨斗目〕。始作物ニ長絹ヲ懸、台端真中ニ出有り。一声一段ニテ出〔但越ス〕。立向所九尺斗。台端ニて幽延し立戻り向合。「波路ヲ」ト謡の内に名乗足。笄（ママ）ヲ前ニ卸シ両手ニて持〔但左ノ方少シ上ル〕。「萬里の高山」ト立廻りながら竿（サホ）ヲ披キ連ニ向。道行常の如く「釣人多キ小舟哉」ト連ニ入、太鼓座ニ行、竿ヲ捨、扇ヲ持、正面ニ出。柱より五六尺斗。差詞言。「おもわぬ所ニ」と作物ヲ見。「衣の懸レリ」ト作物の前ニ寄。「いか様取て」ト両手ニて取、後へ一三足引、「家の寶」ト脇座ニ行、楽長呼懸るト見。問答「叶ふましとて」ト正面ノ方へ一足出。「あからんとすれば」ト向。初同打切ニ放ス。「空に吹迄」と向。問答「あらはづかしやさらハとて」ト太夫の側ニ歩ミ寄、長絹ヲ渡ス。大夫下ニ居。請取時は脇も下ニ居渡ス。立戻リ座ス。物着放ス。「乙女ハ衣」ト見なから居。問答。「東遊ひ」の地返しニ放ス。「実雪を」ト見。舞、序の内見、後放シ五段目地頭ニ見る。終まで。後別義なし。

（45）《雲林院》

出立同前。但掛素袍・大口・少刀。笠脱出ル。扇子〔色ナシ〕持。連素袍上下。尤弐人立向所九尺斗、本着也。連ハ返しニ座へ行、下ニ居。脇ハ着足有。差声謡。「木陰ニ立寄」ト静ニ座へ行、正面ニ向。大夫出、「去レハ社人の候」ト見、語。「我いとけなかりし」ト角掛「あまりにあらた」ト会釈。「をしむもこふも」ト放ス〔但口傳あり〕。次に語り也。「夕の雲の一霞」と下ニ居。廻賦例の如し。大小懸り待謡居乍諷ふ。後楽長出、台ニ入ト見。曲舞不見。「おもひ出たり」ト見。舞放し「夜遊の」ト見。切迄後別義なし。

（46）《項羽》

出立同前。少刀無シ。扇後ロニ指。尤笠なし。連二人。但竹ニ草花ヲハサミカタゲ出ル。立向所九尺斗。名乗ハ《羽衣》の如し。尤半着也。廻賦等連の答済、座ニ行、下ニ居。後ロニ草ヲ置。草先ヲ内ニし持方ハ右也。大夫出、「秋毎ニ」と草花ヲかたげ立一足出、問答。連も同し。「更ば上の瀬」ト正面ニ向一足出ル。連も同前。「乗おくれじ」と大夫の方へ二三足出、「とく乗給へ」と舟ニ乗。「露苅込て（コンテ）」の打切ニも乗。また脇斗も乗ル。大夫句当次第也。乗ルト草花ヲ前ニ置、うしろ方仕手ニ見ヘル様ニ。尤此時は脇斗草先ヲ向ヲニして「舟か着て候」ト言畢て草花ヲかたげ船より揚り脇座ニ行。大夫「舟賃」ト言ト立戻問答。「いづれにてもあれ」と大夫の側ニ行。楽長花ヲ一本抜取て一足引問答。「御物語候へ」と言畢て座ニ戻り下ニ居。花ハ始の如シ。後ロニ置。扇ヲ抜持中入ニ放ス。廻賦待謡同前。但立て謡フ。太鼓声合ウト「一切有情」ト角掛合掌し、畢テ放し下ニ。後無構。尤連女脇の上へ来ル。心得有べし。後別義なし。

（47）《東岸居士》

出立、名乗所同前。但柱方二三尺斗出。答拝過、踏廻り太鼓座へ行。狂言呼出シ廻附済、座ニ行、下ニ居。大夫出、台ニ入と見。「嵐哉」と立、一足出、問答。「御法の舟」の返しニ下ニ居。舞不見。曲舞済ト居乍見、問答。楽長付キ、放し、鞨鼓附出るト見、立一足出、角掛、「所ハ名にあふ」と言。「打連行や」と見。「百千鳥」ト放シ下ニ居。但句当次第也。鞨鼓済ト切迄見。後別義なし。

（48）《唐船》

出立、名乗所同前。答拝済、左へ披キ、踏廻り、狂言呼出シ云云済、座ニ行、下ニ居。仕手連出。狂言来、廻賦済、仕手連台ニ入ト立、一足出、問答。「舟ヲ見候へ」ト脇正面ニ二足程出、階掛ヲ見、「対面候へ」ト大夫ニ向、云畢て座ニ帰り座ス。「いや〳〵」ト向ながら立、一足出、「汝等ハ」ト子方ヲ見、「時刻」と大夫ヲ見。地に取ト放し、座

ス。「此上ハ暇」と向。「当社八幡」と角掛「偽り更ニ」ト向。「暇申て」ト放シ、後別義なし。

（49）《百萬》

出立同前。但段熨斗目・素袍上下・少刀指。先へ子方、次に出る。次第、常の如し。立向所九尺斗。名乗「又是ニ」ト子方。「此頃ハ嵯峨」と直し、答拝過、一足引、子ニ向、「先かう御座」ト言畢て、左へ披キ三足出、踏廻り、太鼓座の前ニ行、階ヲ見。狂言呼出ス。云云済、座ニ行、下ニ居。尤子ハ「かう御座候え」ト云畢て脇座ニ行、下ニ居。脇、子の次ニ座ス。楽長出て後、子方、「如何ニ申へき」ト居乍子ニ応答。謡過立一足出、大夫ニ向。問答。「ケ程群集の」ト角掛、「などかわ廻り逢さらん」ト見。「もしや萬の」ト下ニ居。「実おもん見れハ」ト放ス。「我子ニ逢せて」ト中腰ニて子をさそひ立テ大夫ヲ見。「余り見ルも」ト諷フ。「心づよや」ト手ヲ放シ、後へ下り下ニ居。「能〳〵是」ト放ス。後別義なし。

（50）《哥占》

出立、次第・名乗同前。尤子方先へ出ル。立向所も同し。答拝済、子ニ向、「先かう御座」と言畢て両人とも座ニ行、下ニ居。何れも《百萬》の如し。楽長出謡。「難波の事も問給へ」と見。廻賦の内立。一足出、問答。尤子も立。大夫「短冊ヲ引て御覧候へ」と大夫の側に行。短冊ヲ両手ニて持見。「北ハ黄」ト云、手ヲ放シ、「ケ様ニ候」と云、後へ二三足引、「又是成人も占の」ト子方ヲ見。大夫謡フト入替り本の座ニ行、下ニ居。後の問答居乍謡フ。轉に放ス。曲舞過、大夫諷フト見。其儘にて問答。「我子に打連て」と放ス。後別義なし。

（51）《山姥》

出立同前。連女先ニ立、次第二段。連弐人同前也。立向所九尺斗。「是ニ渡候御方」ト連女ヲ見。「我等御供申」ト直し、答拝過、踏廻り立向、道行本着也。廻賦「此所ニテ」ト女ニ会釈。「先かう御座」ト云。女脇座ニ行、下ニ居。連

弐人も其後ニ付、脇ハ中程ゟ右へ踏廻り、太鼓座前ニ行、階掛りうけ（「か」？）狂言云云済、大小ノ前ニ四五尺斗出、下ニ居。女ト問答過、又太鼓の前ニ行、狂言シカ〳〵済、連二人の次、少し前ニ行、下ニ居ル。「頓て御立」ト言。女立、脇も同角掛立、一足出、廻賦「申さるゝ如ク」ト狂言ニ向。「いまだ日ハ高ク」ト角掛上ヲ見。「扨此あたりに宿」ト狂言ニ向。大夫呼掛ル。狂言「宿ヲ借レ」ト云。答済大夫ニ向、問答。「さらバかう参」ト左へ踏廻り、始の座ニ行、下に。問答。中入迄可見。廻賦、色々習アリ。狂言より懸る。〔シカ〳〵〕済、大小掛ルト女ニ向、詞有り。角掛居なから待謡謡ふ。後無構。会釈可心付也。

（52）《海士》

出立、次第同前。名乗足、差声謡フ。房前謡ヲト（ママ）向。中腰。連も同前也。四人〔或ハ二人。〕但脇の差諷フ時ハ下ニ居ス。立向所前ニ同し。道行本着也。〔但上掛リハ半着也。〕尤黄昏に及時は半着ニもする也。廻附「又あれ」と右へ大キク披キ「かれヲ待」ト房前ニ会釈。子方、座ニ行、床几ニ掛ル。脇ハ末の連の後に附行、少し前ニ角掛下ニ居。連、子方の次ニ下ニ居。大夫出、「世を渡る業」と見、返しニ立、一足出、問答。「あの水底の」ト正面真中通りヲ見。「苅て参らせ」ト大夫ニ向、地返し放ス。楽長出ルト見。「あれ成里」ト脇正面角掛見。「是成嶋ヲ」ト正面ヲ見。但大夫云合次第也。「扨其玉」ト楽長ニ向、「やあ是杜房前」と子方ヲ見、下ニ居。楽長ヲ見、小方諷フ時放ス。「いかに海人」と仕手ヲ見。「彼海底」ト放し、「かくて」ト見。「此筆の」と楽長子方の側へ行ヲ見送り、中入迄可見。廻賦太鼓の前ニ行。狂言呼出し、連来り云云済、大小例の如ク有て子ニ向、手ヲ下、詞有。待謡角掛居乍。尤地ニて諷フ。後無構。子方の次ニ入。〔但二段返しのときハ習アリ。〕但廻附習アリ。後別義なし。（別ニ習ノ廻附アリ。）

（53）《芦苅》

始《山姥》ニ同し。狂言〔然々〕相済、末の連の右の膝角ニ角掛下ニ居ル。楽長出、「是ハ此濱の市に」ト見。「出ば

や」ト立、一足出、問答。「露乍」ト放し、謡済問答。大夫「あれニ見へたる」ト見ル所ニ向、「あらふし（ギ）や」ト楽長ヲ見。「古哥をも引く」ト大夫来り脇ヲさそい角懸三四足出、「目の前ニ見へたる」ト指廻す所ヲ見。「あれ御覧ぜよ」ト向合。其儘座ニ帰り、下ニ居。謡済、連女の方へ行ヲ見送りながら下ニ居。「某追付」ト立。連女「いや人の」ト見。中腰ニ成、「さあらば御後ゟ」ト（下ニ）居、角掛ル。「木陰にまと居して」ト大夫ヲ見、廻附有。物着の内、狂言〔シカ〳〵〕有。済テ仕手台ニ入ヲ見、廻附云。論儀、連女の「又向へさす盃や」ト見。轉・曲舞、尤放ス。廻賦有。舞不見。連女入。脇ハ謡済て入。舞の後無構。

（54）《小塩》

出立同前。次第・名乗・道行、常のごとし。但連三人也。答拝過、差声謡乍踏廻り「花桜」ト立向也。尤始立向所五尺斗也。廻附過、座ニ行、下ニ居。大夫出、小謡中の打切ニ見、返ニ立、一足出、問答。但脇正面ニ向立、「貴賤群集の」ト見ル也。「実〳〵妙なる」ト角掛「九重の」ト向。初同打切ニ放シ「近頃面白キ人」ト見。「大原や小塩の山」ト放シ謡フ。「今所から」ト見。「名残惜ほ」の打切ニ下ニ居。中入迄可見。廻附有。《海人》の如シ。待謡例の如ク居乍也。後大夫出、台ニ入ト見。「けふこずハ」の打切ニ放シ、舞過終迄見。後別義なし。

（55）《松虫》

出立同前。名乗所太鼓前通り三四尺斗出。尤柱より答拝過、座ニ行、下ニ居。大夫出、謡済時、角掛立一足出、差謡フ。「寄来ル人」ト大夫ヲ見。問答「今ハ秋の風」と扇ヲ披キ、楽長の側へ行、「身ヲしれば」ト酌ヲス。但せぬ事も有り。云合次第也。「たといくるゝ共」の打切ニ下ニ居。中入迄可見。廻附、狂言より懸ル。間の謡例の如し。居ながら諷ふ。大夫出ルト見。問答。轉ゟ放ス。切見ル。後別義なし。

（56）《邯鄲》

出立、放シ髪・唐元結。〔四十歳以下ハ紺・萌黄・金入の類。四十以上、十六七以下、亦金入可用〕厚板〔？〕〔碓〕大口・扇〔色入〕・縫紋腰帯・腰舁二人。階掛長短ニ寄へし。「一村雨」の打切ニ出。始大夫出、作物脇座ニ出有。「ふしにけり」の返しニ台の上、枕の側を扇にて二ッ打。膝立替、真中へ下り、手ヲつき、「いかに」ト謡フ。「心地して」トひさ立替、階掛輿ヲ見、「玉の御輿」ト楽長台ゟ下ルヲ輿掛ル。正面ニ少し出、「上人」ト下ニ居ト輿ヲはづし、太鼓座へ行、切戸より入。脇は楽長の後ロ少し右の方ニ寄立居。楽長下に居ルト、笛の上より切戸ニ入。礼序にて子方出、次ニ連大臣三人〔或ハ一人テモ〕出、脇正面太鼓前通柱より上に并居。始の如し。「不老門の前」ト左へ披き、初メの大臣斗立、真中ニ出、手ヲ下ケ問答。「国土安全」ト膝立替、扇ヲ披キ、子方ノ側ニ行、酌ヲし、又膝立替、本ノ所へ帰り、下ニ居。正面ニ後ロヲ見せぬ様専一也。「百官卿上」と子立時同立、すら〳〵ト台の次ニ行、下ニ居。後別義なし。〔但輿ハ例ノ如ク、階掛ニ待居。「心地して」ト脇見ルト立、静ニ側へ行。〕

（57）《鐘馗》

出立同前。名乗所太コ右の手廻（トヲ）り、答拝過一足引、打切て道行謡フ。「海路」ト右へ出、「夜程もなき」と座ニ行、謡済ト大夫呼懸ルト向。一足出、問答。「草虫露」の打切ニ下ニ居。中入迄可見。廻賦・待謡例の如し。後楽長出、「宝剣光」ト見。切迄後別義なし。

（58）《昭君》

出立、名乗所同前。但少刀指。答拝し、座ニ行、下ニ居。尤例ゟハ四五尺下り居ル。少角掛、楽長出。謡済、床几ニ掛ルト立向、一足出、問答。〔但階掛りニて大夫スル時ハ《天コ》のことし。〕「先夫江御入候へ」ト本座ニ行、下ニ居。「いかに」と其儘言、「散掛ル花」ト放ス。中入ニ脇も入。習有り。

（59）《猩々》

出立・名乗所同前。但少刀なし。答拝過、一足引、大小打掛。謡済て座ニ行、下ニ居。大夫出ル。台ニ入ト見。舞放し過ルト切まて見ル。後別義なし。

（60）《舟橋》

出立、大格子・水衣〔緋〕。其外同前。但立向所七八尺斗、半着也。廻附、連の答済、座ニ行、下ニ居。楽長出、「二川の流」ト見。返しニ立、一足出、問答。「所ハ同し名」の打切ニ放し、「渡りを通らでは」ト向。詞有。語、下ニ居て謡。尤脇も下ニ居。中入迄見。廻附。間の謡常の如し。居乍連女謡フト見。翔放し、済ト見。終迄後別義なし。

（61）《野守》

出立同前。尤房袈裟。常の白綾地也。水衣緋。一人脇也。次第・名乗・道行、例のごとし。但初ニ作物大小の前ニ出有。本着也。廻附言畢て、座ニ行、下ニ居。大夫出、小謡「夫ハ明州」と向。返しニ立、一足出、問答。「先是ニよし有げ」ト正面真中ヲ見。「是ハ何と申」ト向。「立寄バ実も」ト始見たる所ヲ見。尤一足可出。「昔の我」と大夫語。下ニ居時ハ脇も下ニ居。立乍語時ハ、「扨こそ箸鷹」の打切ニ下ニ居。廻賦狂言ゟ懸ル。待謡無シ。大小掛リテ扇ヲ指、珠数ヲ右ニ持、作物の方へ四五尺斗出、中腰ニて「有難し」と謡ふ。尤小鼓打掛ル也。「祈けり」と珠数ヲ懸合掌し、「我年行」と云、「南無帰依仏」と一祈いのる。畢て立、左へ披キ、座ニ戻り、下ニ居。大夫作物にて謡フト見。作り物より出ル時中腰にて可見。問答其儘。「暫鬼神」と立乍一足〔口傳有〕。「法味に」ト珠数ヲ掛、「押もんで」祈ル。〔習・口傳有リ。〕「東方」ト角掛合掌し、下ニ居る。「時の宝」ト鏡ヲ大夫持来り渡ス。尤扇ヲ持入也。〔但鏡ヲ前に置事もアリ。其儘置、後見可取。請取時ハ右の〔飯塚注：以下欠文有か。不審。〕〕

（62）《俊成忠度》

出立、直垂・厚板・削(?)烏帽子〔左折〕・色鉢巻・少刀・扇子〔色入〕。右の後腰に矢に短冊ヲ附指。壱人脇也。尤俊成座ニ床几ニかゝる。太刀持、笛の上ニ居。階掛松の下ニて名乗、答拝し、一足引、台ニ向、案内乞請、俊成ト太刀持問答の内放し、「此方へ」と言時向、台ニ入、真中ニ座ス。尤俊成の方へ向、「矢籠ニ短冊」と腰の矢ヲ抜、左ニ持、俊成の側ニ行、中腰ニて渡ス。膝立替、本の所ニ戻り座ス。「いたわしや忠度」の打切にて笛の上ゟ切戸ニ入。後別儀なし。〔但シ俊成ヲ脇ニてスル事も有と云傳ふ。〕

（63）《鵜飼》

出立、名乗所、太コと大鼓の間通。連僧一人也。角帽子。縫ハ不用。答拝し、一足引、差声謡なから「鎌倉山」と立向フ所六尺斗。道行例の如ク廻附済、狂言〔シカ〳〵〕。《鵜》の如し。連ハ地謡の前ニ行、立居。脇来リ座ス時、二三足寄下ニ居。楽長出、「コレニ往来の」ト見。尤居乍也。連僧「あの鵜を」ト見。「河岩落」ト角掛、「一夜接シ」ト脇に向、「喃其お僧」と言時大夫ヲ可見。甘キの時、脇も連も放し大夫「流ニ」ト脇斗可見。中入迄廻附常ノ如シ。待謡立、一足出謡フ。連も同前。「浪間に」ト両僧角掛下ニ居。謡畢て放ス。後大夫出、「千里の外」ト見。切迄後別義なし。

（64）《一角仙人》

出立、厚板・大口・狩衣・唐冠・太刀。初、連女・輿舁二人・大臣二人。名乗所、太鼓前通り、答拝済、一声謡ながら立向。道行、常のごとく。但半着也。着廻賦「爰ニあやしき」ト大小の前、作物ヲ見。「吹来ル風」と謡。「先かう御座候へ」と連ニ会釈。連、脇座の方、作物の前ニ行。輿舁ハ後見座ニ甘。連女の次に脇、次ニ大臣ならび居ル。仕手謡出スト作物ヲ見。「梢も今ハ」と立、謡済問答。初同ニ仕手出ル所ニ下ニ居。又問答。「夫人ハ酌に立玉い」と、

連女ヲ見ル。舞済、「廻ルもたゝよふ舞の袂」と、輿舁太鼓座ニ出、待、連女来ト舁入、脇・連大臣入ル。後別義なし。

（65）《清経》

（二番メスミ）出立、大口・掛素袍。守り懐中。笠冠り。出、次第・道行、常のごとし。半着也。夫ゟ階懸りへ行、案内ヲ乞。「ヤ」ト笠ヲおとし、「是ハ御こへにて有けに候」とつれゟ六尺斗控へ真中に下ニ居。うつむき居る。「なに身ヲなげ」と面ヲあげ、打切ニ正面ヲむき、中ノ打切ニあしらい「有明の月」と守りヲ取、扇へのせ指上テ、又うつむき詞「御身ヲなけ」とうたい、「是迄持テ参りて候」とつれに守りを指出ス。膝ヲ立替、ふへの上へ角ヲ懸、下ニ居ル。仕手出る。後別義なし。

（66）《葵上》

連大臣出立、ゑほし・狩衣・大口・扇。連、座ニ着間クツロギ、名乗、常の如シ。ツレヨリ三尺程上、下ニ居。連ニツレアシライ。「頓て梓ニ」ト諷フ。神子「もしかよふの人にてもや候らん」と諷フ。アシラヒ。「大方ハ」と。中入迄別義なし。中入に狂言呼出しセリフ。脇出立、頭巾・水衣・袈裟・厚板・大口・珠数・扇・少刀。狂言ゟ呼出シ、階掛り角懸五足出ル。「九識」と謡フ。「いか成者ぞ」ト狂言アシライ問答。夫ゟ舞台へ入。大臣と問答済、大小ノ前へ行、扇ヲ指、珠数持直シ、作り物の前にて中腰イノリ、後ロへシテ来るとき、「なまくさまんだ」とイノリ、働〔口傳〕。シテ、作物に手ヲ掛ル時、ワキ数珠にて押へ、「重て珠数ヲおしもんで」トイノリ、「即心成佛」ト打、三足引、膝つき居ル。「とくじゆのこへ」と立、座へ行、扇ヲ持、下ニ居ル。切迄別義なし。

注

1　『新城能楽補遺』　大原紋三郎　私家版　平成10年5月発行　p158-160

2　川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』は、五回に分けて「名古屋芸能文化」に翻刻・掲載された。詳細は以下の通りである。

①「仁」冊「新城　川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』（一）」拙稿「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会　第8号　1998年12月発行　p9-38

②「義」冊「新城　川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』（二）」拙稿「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会　第9号　1999年12月発行　p48-77

③「礼」冊「新城　川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』（三）」拙稿「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会　第10号　2000年12月発行　p25-54

④「智」冊「新城　川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』（四）」拙稿「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会　第11号　2001年12月発行　p20-43

⑤「信」冊「新城　川村類造旧蔵本『高安流脇仕舞附』（五）」拙稿「名古屋芸能文化」名古屋芸能文化会　第12号　2002年12月発行　p52-76

なお、これら五点の拙稿はすべて『近世・近代能楽資料の収集・整理とデータベース化―東海地域を中心に―』（平成12年度～平成14年度科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）研究成果報告書　課題番号　12610457　研究代表者　飯塚恵理人　平成15年3月発行）に収録されている。

〔付記〕　貴重な資料の閲覧・翻刻を許可いただきました川村直子氏に心より感謝致します。また貴重なご教示を頂きました故大原紋三郎氏・筧鉱一師に心より感謝致します。本稿は平成十五年度科学研究費助成基盤研究（C）による成果の一部となります。